

わる(酸性度が増す)デモンストレーション実験や雪片のモデルとして石鹼の薄片を浮かべる実験があった。実際の雪片を浮かべての融解の研究は会議の初日に 16 mm

映画で紹介されていた。なお、この風洞の値段は磯野先生からお聞きした話では約2億円とのことであった。

平成元年度春季大会を振り返って

講演企画委員会

去る5月の春季大会は、参加総数が500名を越える盛況でした。研究発表に関しては、口頭発表を2種類に分ける初めての試みがなされたり、2日目の昼休みにはトピックとして緊急の話題が提供されたりしました。3日目にはスペシャル・セッションが2件開かれました。ポスター・セッションでは、ビデオ使用の発表が2件あって人気を呼んだし、その他、自前のボードを用意しての飛入り発表もありました。これらのそれぞれが今後の大会の在り方にヒントを与えているように思われます。

講演企画委員会は、大会の在り方を考えるためのアンケート調査を行い、会員の皆さんの感想および意見を寄せていただきました。大会参加者の数%に当たる25人の方々から寄せられた回答は、その多くが口頭発表の新方式に賛同するというものでした。直接委員に寄せられた感想やコメントも賛意を示してくださったものが多く、委員会としてはホットした次第です。こういうことから、寄せて戴いた声を参考にし、改良を加えつつ試行を続行することに致します。なお、第一種講演は、発表する人のみならず、それを聞く側の人にも、情報交換の方法として効果的で、事前の懸念を打消すような良い一面がある事を実行を通して認識できたのは幸いでした。これは、参加者の方々が、大会の実情と新方式の趣旨とに理

解を示され協力的かつ適切に対応して下さったことの表れであると受取っております。

しかし委員会は、春季大会での試行の実態に必ずしも満足しているわけではありません。例えば、第一種講演の比率が高いセッションでも休憩時間をとるところまでには至らなかったし、またその事に関係するが、第一種の割当て時間を大幅に超過した例が幾つかありました。これらは趣旨に反しますので講演企画委員会側も発表者側も一層の工夫が必要のようです。また、第二種として発表された講演の中には第一種の方が相応しいのではないかと思われるものも見受けられました。しかし今回は、まだ一回目の試行であり、それに委員会の説明不足も有ったでしょうから、それを過大に問題視するのは拙速すぎましょう。各人が実行を通じて種別のそれぞれの利点を知りその特徴になじむにつれて、この辺りの問題は自ずと少なくなるものと思います。

文頭を書きましたように、春季大会は大いに賑わいましたが、これを滞りなく運営するために大会事務局(気象庁観測部の方々)が払われた努力は大変なものがあったと思います。また、講演企画委員会からの注文にも快く便宜を図って下さったそれらの方々に、この場を借りて深く感謝致します。